

第1章 真の「自由」を手に入れろ

自由への願望

これまでの人生の中で、誰しも一度は「自由になりたい」と強く願ったことがあるのではないだろうか。

僕はこの本の執筆にあたり、20～30代の男女計120人を対象に「自由なライフスタイルに関する意識調査」を実施している。まずはその結果の一部をここに紹介しよう。

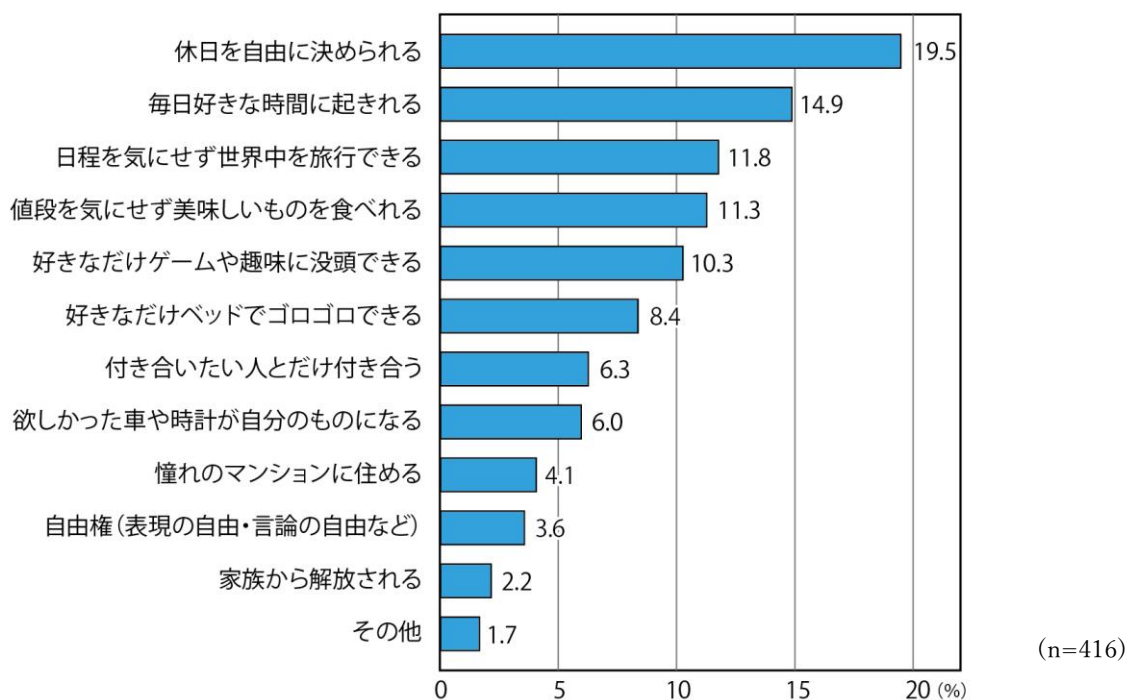
「あなたは『自由になれる』と聞くと、どのようなことをイメージしますか」という問いに対し、「休日を自由に決められる」とする回答が調査中19.5%と最も多かった。

これも含め、上位6位までに「時間に追われずプライベートな時間を十分に楽しむ」ことを示す回答が連なり、全体の75.9%を占めている。

また、これらに挟まれる形で「おいしいものを食べる」が4位（11.3%）に位置する。

8・9位には「マンション、車、時計」といった高額なものを得たいとする回答が続き（10.1%）、人間関係を示す回答は全体の8.5%。

一方、憲法における「自由権」とする回答は3.6%にとどまる結果となった。



人が描く「自由」像は、実に十人十色と言えそうだ。しかし、その欲求の質を大別すると、

- ・自分の欲求が満たされること
- ・ストレスや不安から解放されること

このどちらかであると言える。

欲求が満たされていないから、それが満たされることを「自由」と考え、ストレスや不安に晒されているから、そこから解放されることを「自由」と考える。

では、その「自由」を得られない要因、或いは障壁となっているものとは一体なんだろう。

調査では「日々の仕事や生活の中で、不満に思っていることやストレスを感じていること」についても回答を得ている。その上位回答は次の通りだ。

順位 要因（割合）

- 1 対人（15%）
- 2 収入が少ない・金銭難（9.4%）
- 3 趣味・購買に対する我慢・節約（8.6%）
- 4 通勤（7.9%）
- 5 拘束時間（7.2%）
- 6 職場・仕事（5.0%）

1位の「対人」とする回答のうち、9割以上は職場の人間関係であった。

もし「通勤して働く社員」であることから解放されると、これら上位を占める「不満」や「ストレス」のほとんどが解消される。

そしていまよりも収入を得ることができれば、儉約の日々からも解放され、この6つの問題は全て解消されることになる。

この結果から見えてくることは、「いまの職場環境から解放されることが、自由を得るもっとも有効な手段」と言えそうだ。

続いて、「将来に対して不安に思っていること」の上位回答を見ていこう。

順位 要因（割合）

- 1 老後資金・生活（25.9%）
- 2 収入・貯蓄（18.7%）

- 3 養育・教育費 (7.9%)
- 4 健康 (7.9%)
- 5 介護 (7.2%)
- 6 結婚 (5.0%)

1 位から 3 位までは、大方お金で解決できることと言える。これらを合わせると全回答の過半数 (52.5%) を占める。

この調査結果から推測すると、「いまの働き方は、人々を自由から遠ざけている」と言えるのではないか。そして自分らしく生きようとする、根本的な仕事の在り方から変えていかなければならないことにも気づかされる。

また、将来が不安にならないために、十分な資金を早い段階から確保し、将来にわたって安心して暮らせるように準備する必要もありそうだ。

では、一人一人が日々のストレスや不安から解放され、自分の欲求を満たし、更に将来にわたって安心して暮らすためには、どうしたら良いのだろうか。

次に、それを探っていくこととしよう。

自由の定義

いま、多くの人は、「毎日好きな時間に起きたい」「値段を気にせず美味しいものを食べたい」「好きなだけゲームに没頭したい」といった、「自由になりたい」という気持ちを少なからず抱えながら、日々過ごしている。

それに応えるかのように、ネット上には「自由」を唱う広告が溢れている。

副業や起業を考えればなおのこと、「ネットビジネスで自由になる」「PC 1 台で自由に生きる」といったフレーズが、目に飛び込んでくることだろう。

実際、僕も一貫して「自由なライフスタイル」を提唱してきた。

僕がネットビジネスを始めたきっかけも、いろんなことから解放されて「自由」になりたかったからだ。

多くの人は「自分の欲望を満たすこと」或いは、「日々ストレスを与えてくる“何か”から解放されること」を「自由」と捉えている。これは前述の調査でも明らかだ。

一方、日本国語大辞典によると、自由は「自分の心のままに行動できる状態。」と定義されている。

「自由」という言葉の解釈は、個々によって違うとともに、時代や国によっても異なりそうだ。

そこで、自由の定義について考えてみたい。

これにより、「自由」を手に入れるためにはどのような思考や行動が必要なのかを明確にすることができるだろう。

まずは歴史を紐解いていくことから始めていこう。

西洋的自由とその語源を求めて

まず、「日本語訳」という観点から、自由の語源を辿ってみたい。

英語の「liberty」と「freedom」は、昨今ほぼ同じ意味として用いられている。

敢えて区別すると、一般に「liberty」は政治的自由を指し、権力や社会の圧力からの支配や強制を受けない。

そして「freedom」は主に精神的自由を指し、他からの拘束を受けずに自分の意志で行動を選択できることとされている。

19 世紀、西欧ではフランス革命（1789 年—1799 年）の影響により、自由主義（liberalism）とナショナリズムの思想が広がった。

これは、ジョン・スチュアート・ミルなどのイギリスの啓蒙主義時代の政治哲学を源泉とする思想による（啓蒙思想・啓蒙主義：17 世紀後半にイギリスで興り、18 世紀のヨーロッパにおいて主流となった）。そして、この思想が明治初期に日本に入ってくることとなる。

この J・S・ミルの、政治学の著書『On Liberty（自由論）』（1859 年）は、のちに中村正直によって和訳されたが、当初は『自由之理』（1872・明治 5 年）という書名であった。

この訳本は、日本に自由思想のブームを巻き起こしていった。

日本において言葉としての「自由」は、この訳語から定着したものと言われている。

また「自由」という言葉を、はじめて西洋の「自由精神」と関連させて日本に紹介したのは、福沢諭吉だとされている。

福沢は『西洋事情・初編』（1866 年）の巻頭にて「自由」の言葉を用いている。

また、「自由」を文明と関わらせて「文明の自由」と「野蛮の自由」との区別を強調する一方、「自由」と「自任意」を用いながら訳語を用心している。

もともと日本にはない概念に対し、「自由」の訳語を当てていたという懸念からである。

福沢はじめ、明治の啓蒙者たちが、西洋の政治や文化を日本国民に紹介する際には、蘭学時代の訳語や中国からの訳語などが混用され、「liberty」「freedom」の訳語として、中国詠歌辞書から「自主・自在」、蘭和辞書による「不羈（ふき）・自由」などが併用された。

『On Liberty』の翻訳にあたった中村も、『自由之理』という訳語の横に「自主之理にも翻訳できる」と注解している。

この時代の日本において、「自由」は自由権利のキーワードとして知識人に操られる一方、すでに西洋文明の代名詞、日本文明開化の目標となりつつあった。

そして、自由民権運動（1874・明治7年）を契機に、日本人が個人の権利を意識しはじめ、日本社会において「自由」という概念が確立されていく。

このように「liberty」「freedom」は、イコール「自由」ではないこと。

翻訳にあたっては「自任意」「自主・自在」といった言葉も用いられたということを知っておきたい。

日本には“禅”的自由がある

次に、日本における宗教的な観点から自由の意味を探っていきたい。

『禅と日本文化』（講談社 1985・昭和60年）において、柳田聖山は「自由という言葉、もしくは思考のうちには、およそ3つの意味があると思う。」としている。

第一は、**好き放題、勝手気ままにふるまうこと**。いわゆる「わがまま、独りよがり」だ。

例として、ブッダが亡くなり弟子たちが悲しみに打ち沈んでいるとき、ある弟子が、「先生が活着している間、我々は自由を得ることができなかった。いまや我々は自由である」と叫んだという話が記されている。

中国語では「自由」をこういう意味に使うのが普通だったようだ。

第二は、**何らかの拘束から解放されることを求める自由**。つまり“何かから”の自由だ。

「奴隷解放」や「自由主義」、或いは我々が普通に使う「自由になりたい」といったものは、全てこの中に含まれるとしている。

第三の自由は、**自主的、創造的な自由**。

何かからの解放ではなしに「それ自ら存在することの自由」として、自分の能力や個性を何ものにも拘束されずに、完全に発揮することのできる自由である。

ただ「そうした積極的な自由は、普通の世俗の生活の中では、容易に実現できないから、一種の精神的な営みとして、宗教、哲学、化学、芸術といった特殊な精神的世界における理想ということにならざるを得ない。」と述べている。

そして第一、第二、第三の自由は重なる場合もあり、第二の自由を押し進めると第三世界にゆき着くが、第三の自由にとどまらず、第一、第二に還ってくる。

これについて柳田は、「いわば絶対的自由は、常に自らを総対比することによって、かえって豊かな内実を持つことになる。」と唱えている。

一方、鈴木大拙は、『東洋的な見方』（岩波文庫 1997 年）の中で、次のように述べている。

「元来自由という文字は東洋思想の特産物で西洋的考え方にはない。いまでは自由をフリーダムやリバティに該当するものときめてしまっているが、西洋のリバティやフリーダムには、自由の義はなくて、消極性をもった束縛または牽制から解放せられるの義だけである。それは否定性をもっていて、東洋的自由の義と大いに相違する。」

そして、自由には元来政治的意義は少しもなく、その字の如く「自」が主になっていると、鈴木は語る。

天地自然の原理そのものが、他から何らの指図も制裁も抑圧も牽制もなく「自ら（みずから）」または「自ら（おのずから）」出るままの働きであり、他から手の出しようがない。これを自由の“義”と説いている。

辞書によると、「みずから」という言葉は「身つから」から転じ、「おのずから」という言葉は「己づ柄」から転じたとされる。

従って、我が身に“由る”ことが「自由」であり、そこには「拘束や支配」もなければ「解放」もないということになる。

つまり「自由」とは、自らに在り、自らに由り、自らで考え、自らで行為し、自らでつくるということである。

また、鈴木は強い調子でこうも述べている。

「今日、われわれ日本人の中でも、とくに若い人々の中では、『自由』の本来の東洋的義を知っているものは、一人もいない、と言い切っても可なるべしと、自分は信ずる。」と。

憲法から「自由」の姿を探し出す

学校で「自由」について学ぶというと、憲法の印象が強いだろう。

普段の生活で意識することはあまりないが、いま“日本”の国民として「普通に暮らせる」という恩恵は、実はもっと大きな恩恵が基礎になっている。それが日本国憲法だ。

日本国憲法は、1946（昭和 21）年 11 月 3 日に公布され、1947（昭和 22 年）5 月 3 日から施行されている。条文の冒頭には、このようにある。

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起こることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。」

日本国憲法において、自由権は 3 つに分類することができる。すなわち、精神的自由権、経済的自由権、身体的自由権だ。

1. 精神的自由権

思想・良心の自由（19 条） 信教の自由（20 条 1 項前段）

集会・結社、表現の自由（21 条） 学問の自由（23 条）

2. 経済的自由権

居住・移転、職業選択の自由（22 条） 財産権の不可侵（29 条）

3. 身体的自由権

奴隷的拘束や苦役からの自由（18 条） 法定手続の保障（31 条）

住居の不可侵（35 条） 被疑者・被告人の権利保障（33 条、36～39 条）

我々の営みは、この国に住む限りこの国の法の下、権利を与えられた上で成り立っている。

憲法第 21 条には「集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。」とある。

この本で、僕がどのような視点で何を考えているかを「自由」に書いて皆さんに届けられるのも、この法によって「表現の自由」が保障されているからと言える。

もし、戦争や内乱などによって国が自由を失うと、我々からも多くの自由が奪われることになる。
また、もしこの世界で一人一人が自分のしたいように何でもできる「完全な自由」を得たとしたら、無秩序の世界となるだろう。

つまり「自由」は、社会の仕組みや秩序と密接に関係していると言える。
こうした社会との“バランス“を保つということも「自由」に含まれていることを忘れてはならない。

いま僕たちは、生きていくために必要な、衣・食・住や医療・福祉などの全てに恵まれている。
だからこそ、自らの人生を自ら生きる「自由」を選ぶことができるのだ。

自由に生きたいと思うこと、それを実現できることは、国の統治があつてこそということになる。
この時代に、日本に生まれてきたことに感謝したい。



ここまでの流れを整理してみよう。

- ・いまの社会で一般的に使われている「自由」の言葉は、西洋の「liberty」「freedom」が語源である。「liberty」の翻訳にあたっては、「自由」という言葉ではその意味を表しきれず、「自主任意」「自主・自在」などの言葉も用いられた。
- ・禅の観点では「liberty」「freedom」とは違う、自主的、創造的な自由もあるとされる。これは「ものがその本来の性分から湧き出る」様子を表す。
- ・日本国憲法では、我々の自由の権利は保証されている。それは国の統治があるからこそ得られる国民の権利だ。

振り返ってみて、気づいただろうか？

「自由」はどのような定義や解釈にも、「拘束や支配」と、そこからの「解放」の意味を含んでいる。
その一方で「自主」「自在」の意味をも内包しているのだ。

再度、柳田聖山の言葉を引用しよう。

「第一、第二、第三の自由は重なる場合もあり、第二の自由を押し進めると第三世界にゆき着くが、第

三の自由にとどまらず、第一、第二に還ってくる。」

何かから解放されたいとの願いは、ときに勝手気ままな振る舞いや独りよがりになることもあるかもしれない。だが、やがて自主的、創造的な自由に行きつく。

しかし、そこにとどまることはなく、この循環は繰り返されていく。

多くの「自由」を知ることで、あなた自身が「自由」に近づいてきた気がしないだろうか？

「自由」を得るための第一歩

もし、あなたが「自由になりたい」という気持ちを抱えながら日々過ごしているのなら、「どのような手段で自由になるか」を自ら決めなければ、いつまでたっても自由は手に入らない。

その手段を見極めるには、まず「自分の本来の性分から湧き出るもの」に従うことを“決断”する必要があるだろう。

それが「成功」イコール「自由を手に入れること」への確かな道となるはずだ。

「お金があれば好きな暮らしができるのに」と思っていたが、実は「自然の中で質素に工夫して暮らしたかったのだ」と気がつくかもしれない。

自分が本当に欲しかったものがわかれば、すぐにでも実現のためのアクションを起こせるだろう。

また、いまはまだ自分が本当は何がしたいのかが見えてこないとしても、「まずは朝、目覚まし時計なしで起きたいときに起き、寝たいときに寝たい。それを切望している。だからその暮らしを絶対手に入れる」と、自分のいまの欲求を明確にできれば、その手段を本格的に検討する段階に進めるだろう。

「とにかく毎日の満員電車と遅くまでの残業で、自分の時間がないのが耐えられない。ここから解放されて自由になりたい。」という“願望”で思考が止まっているのなら、その先に思考を進めるために“決断”する必要がある。

しかし焦る必要はない。

現在どの段階にしようとも、ネットビジネスはあなたの夢をかなえるための手段となり得る。

どんな「自由」を願う人にも寄り添うことのできるビジネススタイルだ。

自然の中で質素に暮らしたい人は、その暮らしを維持するのに十分な収入を得て、安心して田舎暮らしを満喫できるだろう。

また、自分の時間を取り戻したい人は、ネットビジネスの実践を通してその願いは間もなく叶うことになる。そこから自分は何がしたいのかを見つめなおしても良いのだ。

始めてすぐに大金を得ることは期待できるものではないが、どんなに時間のない中で始めたとしても、数ヵ月後には 10 万円以上の月収を手に行っていることだろう。

そこまでくると、まもなく 100 万円台が見えてくる。そして 1000 万円も夢ではないことが確信できるのだ。

サラリーマンであれば、どの段階で会社を辞めるべきかという「嬉しい悩み」を抱えることとなる。

こうして日々の暮らしに余裕が生まれ、自分の思い描いた「自由な暮らし」を実現できる環境が整っていく。しかもわずか一年、或いは数年の間に。

これこそがネットビジネスの醍醐味と言える。

まずは無理のない範囲で時間を確保し、「手堅く・誰にでも難しくなく・収益の上げられる」ビジネスから実践するのが良い。

ネットビジネスのノウハウは、ネット上でも入手することができるが、いろいろありすぎて取捨選択が難しいことだろう。

あなたがこれから遠回りすることなく、効率よく取り組んでいくためには、必要な情報がまとめられている良質な教材を入手すること。

その判断が、最も手堅い「自由を勝ち取るための戦略」となる。

さて「自由」を手に入れるイメージはできただろうか。詳しい「戦略」については、後の章で述べることとする。

さいごに、あなたのために大事な言葉を添えておこう。

自由になれなかった原因はただ一つ、「自由」の本当の意味を知らなかったから。

ただそれだけなのだ。

富と幸福と「自由」

「自分らしい生き方」に必要な年収、資産規模とは

「自由」とは何か、そして自由を手に入れるための“一歩”の踏み出し方をお伝えした。
それでは、一体どのくらいの収入があれば「自由なライフスタイル」を手に入れられるのだろうか。

『ユダヤ人大富豪の教え』の著者・本田健氏は「大好きなことをビジネスにして成功し、自分らしく生きていく」ことを提唱している。
それによると「年収 3000 万円、資産規模で 1 億円」くらいあれば、経済的不安を感じることなく暮らしていけるという。

「大富豪」とまではいかないまでも、多少の贅沢をするにはまったく問題ないというわけだ¹。

あなたは「年収 3000 万円、資産 1 億円」という額をどう感じるだろうか。
「その程度の額を得るのは簡単だ」とは、ちょっと考えにくいかもしれない。

そこで、ここでは一旦グローバルな視点に切り替え、世界の大富豪いわゆる超富裕層の実態、そして収入や貯蓄額と幸福度の相関性について、様々な調査資料をもとに追っていきたい。

それによって、きっとあなたのお金に対する思考がこれまでより柔軟になり、どれほど大きな金額にも動じなくなるだろう。
そして、3000 万円の年収が決して遠いものではなく、自分にも手が届くイメージができるようになるはずだ。

それでは、世界と日本における富裕層の割合から見ていこう。

富裕層の増加とともに、そこに仲間入りできる可能性も高まっている

世界の様々なデータを提供する Global Wealth の公開データによれば、総資産 5000 万ドル（55 億円）を超える超富裕層は、世界に 12 万 9730 人いる。

その内訳は北アメリカ 4 万 4000 人、アジア 3 万 5880 人、ヨーロッパ 3 万 5180 人。ここから、超富裕層の約 30% が北アメリカに集中していることがわかる。

アジア圏では日本 9960 人を筆頭に、中国 8800 人、香港 5140 人、インド 2920 人、韓国 2610 人、台湾

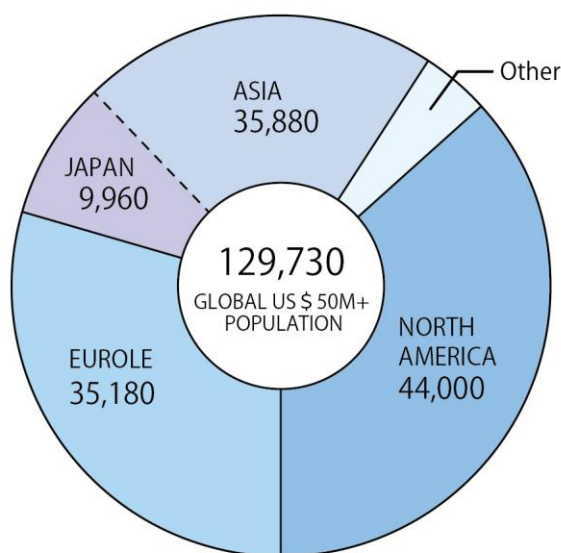
2010 人と続く。

世界の超富裕層の約 30%が北アメリカに集まっているイメージはつきやすいが、実はアジアの超富裕層も、約 30%（世界の約 7.7%）が日本に集中しているのである。

そして、日本の超富裕層 9960 人の国内での割合は、1 万 2500 人に 1 人ということになる²。

こうして数字を追っていくと、富裕層と呼ばれる人々が意外と身近に感じられないだろうか。

世界の超富裕層



Global Wealth「INDIVIDUALS WORTH OVER US \$ 50M IN 2017」により作成。

次に、日本国内の富裕層の世帯数と資産規模をみていこう。

野村総合研究所は、日本における純金融資産保有額別の世帯数と資産規模を、各種統計などから推計している。

それによると、1 億円以上の純金融資産を保有する世帯数は 126 万 7000 世帯とされ、このうち 5 億円以上は 8 万 4000 世帯である。

126 万 7000 という世帯数は、全世帯数（約 5372 万 3000）の約 2.4%、つまり 42 世帯のうち 1 世帯は資産 1 億円以上の純金融資産を保有していることになる。

先述した 1 万 2500 人に 1 人という純資産 55 億円以上の超富裕層数に比べると、ずいぶん身近に感じる

はずだ。

また、純金融資産保有世帯数は、2013年以降増え続けている。

2017年（この調査時）には、それまで最も多かった2015年の121万7000世帯から、更に約5万世帯増加している³。

この状況は格差拡大を映し出した結果と取れるが、同時に超富裕層になり得る確率が高まっているとも言える。

実際ネット起業をして数年で億単位の資産を築いた人が、僕の周りにだけでも何人もいる。

いまの時代、富裕層の仲間入りができる可能性は誰もが持っているのだ。

せっかくチャンスを得やすい時代に生まれてきたのだ。いま挑戦しない手はないだろう。

純金融資産保有額の階層別にみた保有資産規模と世帯数 (2017年)

マーケットの分類(世帯の純金融資産保有額)

超富裕層(5億円～)

84兆円
(8.4万世帯)

富裕層(1億円～)

215兆円
(118.3万世帯)

準富裕層(5千万円～)

247兆円
(322.2万世帯)

アッパーマス層(3千万円～)

320兆円
(720.3万世帯)

マス層(3千万円未満)

673兆円
(4,203.1万世帯)

世帯が保有する金融資産の合計から負債を差し引いた金額(純金融資産保有額)を基準として5つに分類。
野村総合研究所「NewsRelease2018.12.18」により作成。

億万長者は「遺産」ではなく「機会」を活かす

では、いわゆる億万長者と呼ばれる人たちは、どのようにして富を得たのだろうか。

『となりの億万長者』（トマス・J・スタンリー、ウィリアム・D・ダンコ著）によると、アメリカの億

万長者には共通の特徴があるという。

まず、億万長者の過半数は 1 ドルたりとも遺産相続を受けておらず、今後遺産をもらう可能性がある人も 1 割を切っている。

つまり、親や親戚からの相続で億万長者になったのではなく、自らの手で富を得てきたのだ⁴。

また、バンク・オブ・アメリカ傘下の US トラストが毎年、金融資産 300 万ドル（約 3 億 2820 万円）以上の人を対象に行っている『富と価値に関する洞察』調査によれば、富豪と呼ばれる人たちは、特別恵まれた道を歩んできたわけではなく、育った家庭も投資戦略も、意外なほど平均的であることがわかっている⁵。

US トラスト社長キース・バンクス氏によると、彼らの人生における強みは、金銭的にとても恵まれているというまれな環境ではなく、「幼いころから家庭内で身に付けた基本的な価値観や自制心、可能性に対する感覚を通じて、あらゆる機会を最大限に生かす力を持ち合わせるようになっていた」ことだと語っている⁶。

これは、一般的な「超富裕層」「億万長者」のイメージと少し異なる人物像ではないだろうか。これまで、はるか遠くに見えていた人々が、実は思った以上に近くにいるかもしれないのだ。

では次に、その億万長者たちの収入や貯蓄、そして幸福感との関係を見ていこう。

貯蓄や資産で高められる幸福度には限界がある

人々がお金を求める理由の多くは「幸せになりたいから」とされている。では、お金があれば本当に幸せなのだろうか。

アメリカの経済学者リチャード・イースタリンは、収入と幸福度の関係性について次のような説を唱えている。

「貧しい時は収入が増えると幸福度が増し、収入が一定水準を超えると幸福度との相関はなくなる」

これは「イースタリンの逆説」と呼ばれている⁷。

また、アメリカの認知心理学者で『ファスト&スロー』の著者、ダニエル・カーネマンが 2010 年に実施した調査によると、「もうそれ以上は幸福感を味わえないという所得の閾値（いきち）は、物価の高い地域では年収約 7 万 5000 ドル。

これを超えると所得に伴う幸福感の増加は止まる」という結果が得られたという⁸。

この2つの説はいずれも「収入がある一定のラインを超えると、それ以上幸福度は高まらない」ことを示している。

では、日本の場合はどうだろうか。

内閣府による『満足度・生活の質に関する調査』の、世帯年収に対する満足度の結果から検証してみよう。

世帯年収 / 総合主観満足度

100 万～300 万未満／5.20 点

500 万～700 万円未満／5.91 点

2000 万～3000 万円未満／6.84 点

1 億円以上／6.03 点

これによると、世帯年収が「2000 万円～3000 万円」までは、年収の上昇とともに満足度も高まる。しかしそこで頭打ちとなり、あとはゆるやかに下降している⁹。

この調査結果から、日本もアメリカ同様「収入が増えれば増えるほど幸福度は限りなく高まる」わけではなく、「一定の収入額を超えると幸福度の上昇は限界を迎える」ことがわかる。

では、こうした傾向は、貯蓄と幸福度の関係にも当てはまるのだろうか。

アメリカのアリー銀行で、25 歳以上の一般人 1025 人に対して行なった『貯蓄と幸福度の関係』の調査結果を見てみよう。

貯蓄額 / 幸福度

ゼロ／29%

2 万ドル（約 210 万円）以下／34%

2 万～10 万ドル（約 210 万～1080 万円）／42%

10 万ドル（約 1080 万円）以上／57%

全体としては、貯蓄額の上昇に伴い、幸福を感じる人の割合も高まっている。

つまり貯蓄が 10 万ドル（約 1080 万円）くらいまでは、貯蓄額の増加と幸福度の増加が関係している¹⁰。

では、富裕層についてはどうだろうか。

ハーバードビジネススクールとマンハイム大学の研究者が、2012 年と 2013 年に、大手金融機関が行ったアンケートをもとに 4000 人以上の富裕層を調査している。

純資産額 / 幸福度（1～7ポイント）

150～290 万ドル（約 1～3 億円）／5.79

300～790 万ドル（約 3.24～8.5 億円）／5.81

800～1490 万ドル（約 8.6～16 億円）／5.97

1500 万ドル（約 16.2 億円）以上／5.84

これによると、純資産が 150 万ドルと 1500 万ドルでは、10 倍の開きがあるにもかかわらず、幸福度は 0.05 ポイントしか上がっていない¹¹。

また、幸福度が最も高いのは、純資産を 800～1490 万ドル保有する層（5.97 ポイント）であった。

先の一般人を対象とした調査では、幸福度は貯蓄額に影響を受けていた。

しかし、純資産が 150 万ドル（約 1 億円）を超える富裕層になると、純資産額の大小は幸福度にあまり影響しないことがわかる。

収入が幸福度に与える影響にピークがあるように、純資産もその額とともに幸福度が増すわけではないようだ。

理想のライフスタイルを叶える収入を得ることは、さほど難しくない

僕の周りにいる、年収数千万～億単位の人たちを見ても、収入が一定以上になると幸福感は右肩上がりではなく、横ばいになっているように感じる。

確かに、ネットビジネスによって一般的なサラリーマンでは得られない収入を手に入れば、日々の中で節約する必要はなくなるだろう。

欲しいときに欲しいものが買えて、好きなときに好きなものを食べ、出張や旅行では快適な移動手段を選べるようになる。

ただ、それが当たり前になると、そこから大きな喜びをストレートに得られなくなるようだ。

ある程度、自由にお金を使える暮らしが可能になると、あとは本人の欲求の度合いや目標設定によって、目指す収益や形成する資産規模は変わってくる。

ネット起業家の中には、手堅い収益の上げ方で年収 2000～3000 万円程度を維持してプライベートな時間を大切にしている人もいれば、年間数億円の売上があっても、更に上を目指して新たなビジネスに挑む人もいる。

本田健氏の言う「年収 3000 万円、資産規模で 1 億円」というラインは、仮に一つの事業が立ち行かな

くなったり投資に失敗したとしても、1～2年は余裕を持って生活しながら事業を立て直せる金額という意味で、実情と合致していると考えられる。

さて、ここまで、富裕層が占める割合や彼らの共通点、そして収入や貯蓄と幸福度の関係など、様々な角度から「自由なライフスタイルとお金」について検証してきた。

気づいて欲しいのは「あなたが描く理想のライフスタイルは、それほど多くの富を築かなくても、手に入れられる」ということ。

そしてその収入と資産を手にするには、ネット起業家にとってそれほど難しくはないということだ。

「自分も理想のライフスタイルを手に入れられる」「ネットビジネスの収入でもっと幸せになれる」。

それを他人ごとではなく“自分ごと”としてイメージしてみて欲しい。

理想のライフスタイルを手に入れた「あなた自身の姿」を。

あなたは一年後、どんなライフスタイルを手に入れているだろうか？

早速今夜、ベッドの上で考えてみて欲しい。

そしてもし、止まらないほどワクワクしたのなら、僕にメッセージを送ってこないだろうか。

あなたの夢はきっと叶う。

成功する人の金銭感覚とは

経済的な成功によって自由を手にした人は、成功する前から共通の金銭感覚を持っている。

多くの「普通」の人々は、堅実に節約してお金を貯めることを考える。

いかに節約してお金を貯めるか、その工夫に余念がない。

一方、経済的に成功する人々は、常にお金を活かすことを考えて行動する。

その延長線上に経済的成功、ひいては自由が待っているとんでも過言ではない。

つまり考え方が根本的に違うのだ。

経済的成功者の思考と行動を学ぶことで成功への道を歩みだすことは、いつからでも可能だ。

ここでは、その思考と考え方について解説する。

対価は惜しみなく払え

経済的に成功する人は総じて“太っ腹で寛容”だが、お金の管理はしっかりしている。
彼らは成功する前からこうした特性を持っている。
逆にお金にだらしない人、せこい人、偏狭な人は、いつまでたっても成功しないとも言える。

成功する人は、無駄な経費は迷わず削減するといったシビアな面を持つ。
一方で、大切だと思うものには惜しみなく対価を払おうとする。

例えば、素晴らしい作品を見つけると、それがどれだけ手間暇かけて創り上げられたのかを想像し、その苦勞に敬意をもって「お疲れ様」「ありがとう」という気持ちで金銭を支払う。

こうして、常に相手に対して「ウィンウィンの関係」を築こうとするのだ。

節約するのではなく「回収する」

成功する人の共通点はもう一つある。

彼らは金銭を支払って得たものを、十二分に活かそうと努める。
つまり投資したら、その額以上の何かを回収できるように行動するのだ。

例えば、欲しいと思ったビジネス書が一瞬躊躇するほど高額だったとしても、必要だと思ったら迷わず手に入れる。
そして「自分が取り入れられることは何か」を探す視点で読み進め、大切な要素を見逃さず吸収しようとする。

更に、学んだことを自分のものとするために行動に移す。つまりビジネスで実践してみるのだ。

もし思うようにいかなかったとしても、上手くいかない一つの実証が得られたと彼らは考える。
次にそれを改善する、或いは別の手段を探すといった方法をとる。

こうして一步一步前進し、必ず成果に辿り着くのだ。
結果的に投資額を何十倍、何百倍にも膨らませて回収することとなる。

スピード感を養う

そして、実は成功する人が必ずと言っていいほど兼ね備えている感覚がある。
それは「スピード感」だ。これについては僕も強いこだわりを持っている。

ここでは僕の思考と考え方を例に挙げてみよう。

僕は「人生を豊かにする」という目標に向かって、あくまでも効率重視。一秒でも早く進む。
そのために多少の負債を抱えることになっても、将来稼げる額に比べればちっぽけなものだというスタンスでいる。

お金は後からいくらでも稼げるけれど、時間は戻ることができない。
今日一日、或いはこの一時間で、どれだけ効率よく稼ぎ、如何に早く目標に到達するかが、僕にとっては最も重要なのだ。

だから「お金をぎりぎりまで使って、時間を買う。そして効率よくビジネスに投資する」。

この思考は、僕が「人生を豊かにする」ために考え抜いた手段だ。

過去を振り返ってみても、僕は、無駄なお金の使い方はしてこなかったと自信を持って言える。
これまでの投資の成果は、全て「自分の脳みそ」に詰め込んである。

僕のような極端な考え方を持つ必要はないかもしれない。

だが、自由な生活を手に入れたい、豊かな人生を送りたいと心から願うのであれば、時としてこの超スピード感が必要になるだろう。

成功者は周りも豊かにする

惜しみなく対価を払うこと、「回収する」という考え方の節約術、そしてスピード感を養うことについて述べた。

成功するためには、これらの思考と行動をベースとして、徐々に動かすお金を大きくしていく。
つまり、経済的な成功者の金銭感覚を自ら養い、磨いていくのだ。

こうしてビジネス感覚が研ぎ澄まされ、スキルの精度が上がると、大きく投資して更に大きく回収できるようになる。

すると、自身のビジネスを展開するための有能な人材が集まり、惜しみなく対価を払い続けることができるだろう。

そして自分だけではなく、周りの皆の人生をも豊かにすることが可能となるのだ。

第1章

注

- (1) 本田健 (2004) 『夢をかなえるお金の教え 豊かさの知恵 お金と幸せを呼びこむ「経済自由人」
という生き方』フォレスト出版
- (2) Global Wealth
<https://www.transparency-initiative.org/wp-content/uploads/2018/09/global-wealth.png>
- (3) NRI (2018) 『NewsRelease2018.12.18』野村総合研究所
- (4) トマス・J・スタンリー,ウィリアム・D・ダンコ (著), 斎藤聖美(翻訳) (2012)
『となりの億万長者—成功を生む7つの法則』早川書房
- (5) US トラスト 『富と価値に関する洞察 (U.S. Trust Insights on Wealth and Worth) 』
- (6) FobesJAPAN 『巨額の富の築き方、米の億万長者に学ぶ6つの教訓 (2016.05.28) 』
- (7) メンタリストDaiGo 『「好き」を「お金」に変える心理学』PHP 文庫
- (8) ダニエル・カーネマン (2014) 『ファスト&スロー あなたの意思はどのように決まるか? 』
早川書房
- (9) 内閣府 (2019) 『満足度・生活の質に関する調査に関する第1次報告書』
- (10) Ally do it right. 『New Ally Bank Survey Links Money to Happiness (2013.10.19) 』
- (11) PRESIDENT Online 『富裕層は億の資産残高に全然ときめかない 2018.04.03』

参考

- J・S・ミル(著),中村正直(訳) (2012) 『自由之理』平凡社 (リプリント日本近代文学)
歴史学研究会(編),宮地正人(編) (1997) 『日本史史料〈4〉近代』岩波書店
福沢諭吉 (1872) 『西洋事情 初編 卷之1』慶応義塾
福沢諭吉(著),慶応義塾 (編) (1958) 『福沢諭吉全集〈第1巻〉』岩波書店
王 暁雨『近代日中における翻訳事業と思想受容—「自由」を実例として
(関西大学東西学術研究所紀要 48) 』関西大学東西学術研究所』
『日本国憲法』衆議院 <http://www.shugiin.go.jp/>
柳田聖山 (1985) 『禅と日本文化』講談社
鈴木大拙 (著),上田閑照 (編) (1997) 『新編 東洋的な見方』岩波文庫
袖川芳之・田邊健 (2007) 『幸福度に関する研究～経済的ゆたかさは幸福と関係があるのか～』
内閣府経済社会総合研究所